
嘘ばかりうまくなる (BLEACH)

南条武都

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘ばかりうまくなる（BLEACH）

【Nコード】

N4933F

【作者名】

南条武都

【あらすじ】

『揺れる心は真実を覆い隠す』ある日突然、海燕からデートに誘われたルキア。戸惑いながらも嬉しい気持ちで当日を迎えるが……。
（自サイト掲載）

「朽木！」

後ろから声をかけられて振り返ったら、廊下の先から、足音荒く海燕がやってくる場所だった。

「海燕殿」

慌てて畏まると、いちいち堅くなるなって、と言いながら、海燕はルキアの顔を覗き込んできた。

「朽木お前、明日暇か？」

「は？」

きょとんとして問い返す。海燕はじれたようにガツ、とルキアの頭を掴み、

「明日暇かって聞いてんだよ！　ちゃっちやと答える！」

「わ、は、はい！　暇です！」

ぶんぶん振り回されそうになったので、ルキアは声を張り上げた。海燕はよし、と笑う。

「じゃ、明日俺に付き合え」

「は……」

「につぶいなお前。デートしろつつってんだ」

「……は、はいっ!？」

今度こそ予想外の言葉に、つい素っ頓狂な声を上げてしまう。しかし海燕はそんな事など気にもかけず、

「明日の昼、三芳^{みよし}で待ち合わせな。遅れてくんなよ」

手を振って、さっさと立ち去ってしまう。取り残されたルキアは、しばし呆然と立ち尽くした。

（な……何だ、今のは？　海燕殿は、何を、言って）
デート。

言葉が頭の中でわんわん響く。ルキアはぼ、と赤くなり、まさかそんな海燕殿が私なんかと、と汗をかき、しばらくの間、廊下で一

人百面相をしてしまった。

次の日。緊張しながら「そばどころ・三芳」の暖簾をくぐると、そこにはもう海燕が待っていた。

「朽木、おせえ！ おごらせるぞ！」

「す、すみません」

正確な時間を告げなかったのは海燕なのだから、遅れるも何も無いのだが、ルキアは肩を小さくして謝った。海燕の向かいの席に座ると、さつと品書きが差し出される。

「飯まだだろ。俺はもう頼んだから、お前も頼みな」

「は、はい。えっと……かけそばをお願いします」

「そんだけでいいのか？ 腹減るぞ」

「いえ、大丈夫です」

「遠慮すんな、本当におごらせやしねえよ。……親父！ かけそばとぜんざい、追加だ」

「あ……」

ルキアは赤くなった。甘いものは好きだが、それをことさら口にした事は無かった。海燕がごく自然に甘味を頼んでくれたのは、ルキアが好むと知っているからだろう。

（この人は、本当に良く人を見ている）

海燕は大雑把なように見えて、実は誰よりも気遣いがうまい。自分には出来ないその心遣いが、すごいと思う。尊敬できる、と思う。

「何だよ。俺の顔に何かついてるか？」

「あつ、いえ！ も、申し訳ありません」

ついじつと見つめてしまったので、不思議そうな顔をされてしまう。ルキアが俯くと、海燕は変な奴、と肩をすくめた。

「さて、腹も一杯になったところで……おい、朽木。こっちだ」

「え？ わっ……」

三芳を出たところで、海燕は不意にルキアの手を取って、そのま
まずかずか歩き始めた。

「か、海燕殿？ どちらへ行かれるのですか？！」

人ごみを押しのけるようにして進んでいく海燕の背中に問いかけ
るも、周囲が騒がしくてルキアの声が聞こえていないらしい、海燕
は先を急ぐだけだ。

その大きな背中と、手首を掴む海燕の手の、がっしりした感触に、
鼓動が激しくなる。

海燕は年の頃でいえばたぶん、義兄の白哉と同じ頃だろう。

しかし、これまでずっと見つめ続けてきた白哉の、全てを拒むよ
うな背中とは違い、海燕の背中は大きく、頼もしかった。先に立つ
て歩きながら、こちらの手をしっかり掴んで離さない、その力強さ
が、心強かった。

その強さゆえに、心が許せる人だと思う。

これほど弱く、力の無い自分を、この人なら認めてくれるのでは
と思う。その背中にすがりついて、何もかも吐き出してしまいたい、
と思ってしまう。

「か……」

名を呼びたい。そう思い、口を開きかけたとき、唐突に海燕は足
を止めた。いきなりだったので、

「うぶっ！」

勢いのまま海燕の背中にどん、とぶつかってしまった。

「おい、大丈夫か？ 着いたぞ」

くい、とルキアの頭を押して、海燕は指で示す。見上げたその店
は、呉服屋だった。敷居をまたいで中に入ると、店子が海燕を見て
愛想よく笑った。

「いらっしやいませ、志波様。やっとお心が決まりましたの？」

…あら。今日は可愛らしいお嬢さんを連れてらっしゃるのね。まさ
か、浮気？」

「えっ」

「馬鹿言つてんじゃねえよ、ンなわきゃねえだろ。いいから、こないだの奴、出してくれよ」

ぎよつとして声を上げるルキアと対照的に、海燕は笑って軽く流した。店子は一度奥に引つ込むと、両手に反物を持って戻ってくる。上がりがまちに腰を下ろした海燕は、ルキアにも座るように示しながら、

「朽木、お前の意見を聞かせてくれよ。これ、どっちが都に似合うと思う？」

屈託無く尋ねた。

「……え」

不意に出てきた名前に、ルキアの動きが止まる。

「いや、今度あいつの誕生日でな。一つ着物でも仕立ててやろうかと思つてんだが、どっちが良いか決まらねえんだ」

海燕はルキアの様子に気づかないまま、照れくさそうに頭をかく。「で、こういうのはやっぱ、女に聞いた方が良いかと思つてよ。清音の奴に聞いても、どうせ適当な事しかいわねえだろうが、朽木なら目が確かだろうしな。な、どっちが良いと思うよ」

さ、と反物を示して、問いかけてくる。

店子が広げた反物は、片方は紺に牡丹の花が咲き乱れ、片方は白地に桔梗がつつましく花開いていた。どちらも、目に痛いほど鮮やかで、美しくて、そのほかのものが霞んで見えた。

ルキアは目を瞬いた。ぐ、と着物の裾をきつく握り締め、しかし次の瞬間にはだらりと脱力し、ふ、と笑う。

「そう……ですね。都殿には、そちらの紺のものが、似合うと思います。都殿は肌が白いから、きつとその美しさが際立つでしょう」

「そうか！　じゃ、こいつに決めた」

海燕はぱん、と膝を叩き、上機嫌で店子に言った。

「今度都を連れてくるから、とびつきり上等な着物を頼むぜ」

「はい、畏まりました。では、こちらをお取り置きしておきますね。よろしければ、小物も一緒にいかがですか？」

す、と小物の類が並んだ盆を差し出され、海燕は覗き込んだ。うーん、と顎に手を当て、

「おい朽木、これは……朽木？」

振り返ったが、そこにはもうルキアは居なかった。

（馬鹿だ。私は、馬鹿だ）

土を蹴飛ばすような勢いで歩きながら、ルキアは唇をかみ締めた。目に薄く、涙が溜まり始める。

海燕には、都がいる。強く、賢く、美しい妻がいる。

海燕がルキアにどれほど優しくしてくれたところで、それは部下に対する愛情、それ以上でもそれ以下でもない。

（何を、期待していたのだろう）

望めば裏切られる事は、とうに分かっていたはずだった。

恋次しかり、白哉しかり、海燕しかり。皆、それぞれ大切に思うものがあり、自分は決して一番になれない。いや、一番になれなくてもいい、ただほんの少しだけ、自分の居場所を与えてもらえたら、それだけで満足できるはずなのに。

（馬鹿だ。私は、馬鹿なのだ）

認めて欲しいと。受け入れて欲しいと。そんな大それた願いを、なぜ持ってしまったのだろう。自分にそんな価値など、そんな資格など……ないというのに。

ドンッ！

「うっ！」

突然何かにぶつかり、足が止まった。見上げると、

「ああん？ 何だガキ、ぼーっとしやがって」

人力車の車夫らしい、ねじり鉢巻をしたいかつい男が、こちらをじろつと睨み下ろしてきた。

「あ……。……済まぬ、前を見ていなかった」

即座に謝るも、何か苛々した風の男は、先を行こうとするルキアをさえぎり、

「ちょっと待て、人様にぶつかっておいで、このままなんもせずに逃げるつもりかよ」

「逃げるなどと……今、謝ったではないか」

「だから、何だよ、その偉そうな口調はよ、ええ？ 人に謝るってんなら、相応の仕方つてもんがあるだろうよ」

「何だ、貴様つ……」

不意に腕を掴まれ、ルキアはぎくりとした。このままでは乱暴されるか、強請られるか、どっちにしてもろくな事にはならないだろう。

仮にも護廷十三隊に所属する身、この程度の男に遅れをとるわけにはいかない、と相手の手を振り払おうとした時、

「おい、てめえ」

ぬ、と脇から腕が伸びて、男の胸倉を掴んだ。そのまま、大柄な男をぐいと宙に持ち上げる。いきなり足が地面を離れて、車夫は悲鳴をあげた。

「う、うわっ!？」

「てめえ、俺の可愛い部下に何してくれてんだ、こら」

「か……海燕殿!」

男を吊り上げた海燕は、ゆっさゆっさと前後に揺さぶり、

「天下の公道で強請りたかりたあ、いい度胸だ。話があんなら俺が聞け。いいてえ事があるなら、とつとと言いやがれ。おら、何震えてんだ。さつきあいつに掴みかかってつた勢いはどこいった、ああ!？」

ドスのきいた声で脅しつけるものだから、車夫はすっかり縮み上がった。

「す、すみません、もうしません!」

「信用できねえなあ……。ほんつとーに反省したってんなら、てめえも誠意つてもんをだな」

「か、海燕殿!」

呆気にとられていたルキアは、ぎょっとして海燕の腕にしがみつ

いた。このままでは、海燕のほうが強請りをしかねない。

「わ、私は大丈夫ですから、もう離してやってくださいっ」

「ああん？……ちっ、しょうがねえな」

海燕は舌打ちして手を離れた。男は地面に投げ出され、ひいい、と情けない悲鳴をあげて脱兎の如く逃げた。その様子を見送った海燕は、フン、と鼻を鳴らした後、

「おい、朽木！」

「ひいっ！？」

がし、とルキアの頭を掴んだ。

「てめえ、勝手に出て行っただと思ったら、あんなのに絡まれてんじやねえよ。とつとと打ちたおしや済んだろっが、何強請られそうになっただ」

「は、す、すみませ……いたたたっ！」

ぎりぎりぎり、と手に力が入って、頭を締め上げられる。

「てめえはそうじゃなくてもボーツとしてんだ、気をつける！」

吐き捨てるようにいって、ぶん、とルキアの頭を投げ出す海燕。

ずきずき痛む頭を押さえ、すみません、と涙声で謝るルキアに、

「そらよ」

ずい、と箱が突き出される。

「……え？ 海燕、殿？」

見上げると、海燕は、

「やるよ、これ」

簡潔にいつて、ルキアの手になんかを押しかけてくる。

「あ……」

押し付けられるまま受け取ったルキアは、でも、と反駁しようとして、しかしぎろりと睨みつけられて言葉を封じられる。

「あの……開けても、よろしいですか？」

「おお」

躊躇いがちに箱の蓋を持ち上げる。中には、つげ櫛が入っていた。艶やかな輝きを帯びた櫛には、椿の花が細やかに刻まれていて、美

しい。

「……これを、頂いてもよろしいのですか？」

「おう。俺の野暮用に無理やりつき合わせちゃったからな。ささやかなお礼って奴だ。遠慮なく受け取れ」

言って、海燕は二、と笑った。先ほどまでのごたごたや、ルキアの無礼など全部忘れたかのように、何の屈託も無い、明るい笑みだった。明るくて、優しく、太陽のような笑み。

「海燕殿……」

ルキアは俯いた。ぎゅ、と胸に箱を抱くと、つんと鼻が痛くなる。

（この人は。この人は、眩しい）

眩しすぎて、真っ直ぐに見つめることさえ、叶わない。

腰を曲げて「おい、朽木？ 何だよ、さっきのがそんなに怖かったのか？」心配そうに顔を覗き込んできた海燕に、ルキアは、

「いえ。……ありがとうございます。大事にします」

そつと、笑い返してみせた。胸をつく愛しさと悲しさに、気づかないふりをして。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4933f/>

嘘ばかりうまくなる（BLEACH）

2011年8月15日03時24分発行